



「なんだ、あれは？」

恒彦が唖然として呟いた。

清水家の前。迎えに出た恒彦の目に、ゴジラのごとく歩んでくる巨人の姿が飛び込んできた。遅れて出てきた紗季子も一瞬目を剥いたものの、氷のように冷たい表情は変わらなかった。

近くまで来ると、ヨシオは加夏子をそっと肩から降ろした。

「パパ…ママ…その、ただいま…」

「何やってんだ！ そのデカいのは誰だ！？ 早く降りてきなさいっ！」

一歩二歩、加夏子が二人の方へと歩み寄る。

「あの…あのねパパ…」

「カナちゃん。パパにはワタシから話をしました」

抑揚の無い声で紗季子が告げた。

「そうなんだ」

恒彦はずんずんと加夏子の前まで来ると、やおら頬を平手打ちした。

ぱんっ

加夏子が大きくよろけ転びそうになった。

ヨシオが、巨体に似合わぬ敏捷な動きで手を差し伸べ彼女の身体を支えた。

「…墮ろせ…」

「パパっ！」

「一緒に病院へ行ってやる。今なら間に合う。さ、いくぞ」

加夏子の手を引こうとした恒彦の身体が宙に浮き上がった。ヨシオが無造作に引き上げたのだ。

100kg近い恒彦の襟首を掴み片手で持ち上げてみせたヨシオはさながら大魔神であった。

「おじさん、とーちゃんとおんなじだ」

「なっなっ、何なんだお前は！？ 離せ、離さんかコラッ！」

「とーちゃんってみんなこどもをイジめるのかよ？ なぐったり銛うってきたりするのかよ？ とーちゃんなんてイライナイやッ！ どっかいっちゃえ！！」

ヨシオが恒彦を放り投げた。

大柄な恒彦の身体が玩具のように宙を飛び、向かいのフェンスにぶち当たって落ちた。

殆どワイヤーアクションにしか見えないほど冗談めいた光景だった。

さすがの恒彦が、尻を落としたまま毒気を抜かれた顔でポカンとヨシオを眺めていた。

詰め寄ろうとするヨシオの前を、九十九が塞いだ。

「ヨシオくん。あのヒトはおねえちゃんをイジメたんじゃないよ」

「でもぶった！ オンナのゴぶったりしちゃいけないんだよ！ かあちゃんだっていったもん！」

「おねえちゃんはね、叱られただけなんだ」

九十九の眉が曇り、紗季子の表情が動いた。

「おねえちゃん、なにかわるいことしたの？」

点のような目をすぼめてヨシオが九十九に聞いた。

「わるいことじゃない。でも心配させた」

「しんぱいって、なにを？」

「…清水さん」

九十九がヨシオから視線を振った先に居たのは、恒彦ではなかった。

「ヨシオさん…っていうのね。加夏子がお世話になりました」

「おばちゃん、だれ？」

「加夏子の母です」

「おねえちゃんの…かあちゃん…」

紗季子はヨシオを見上げながら話を続けた。

「おねえちゃんね、赤ちゃんがいるのよ」

「あか…ちゃん？」

「そう。赤ちゃん。おねえちゃん、お母さんになるの」

「おねえちゃん、かあちゃんになるんだ。すごいやっ！」

すごいを連発しながらヨシオが跳ね回った。

ちょっとした地震のようだった。

慌てて紗季子がヨシオを制した。

「お願いだから飛ぶのをやめてちょうだい」

「だってすごいじゃん！ おねえちゃん、おねえちゃんなのにかあちゃんになるんだよ！　すごいよ！」

「聞いて！　おねえちゃんのパパはね、お母さんになるのに反対なの。だから怒って叩いたの」

「え？　だって、あかちゃんがいるんでしょ？」

「誰にでもお母さんになれる訳じゃないのよ。ちゃんと大人になって、ちゃんと子供を育てられるようになって初めてお母さんになれるの。おねえちゃんはまだ子供なの」

飛び跳ねるのを止めたヨシオの足に、紗季子がそっと触れた。

「じゃあ、どうするの？」

「おねえちゃんはまだこれから、大人になる勉強を沢山しなきゃならないの。赤ちゃんの面倒ばかり見ていられないのよ。だからワタシが手伝ってあげる」

「おばちゃんが？」

「そうよ」

「おばちゃん、またかあちゃんになるんだ」

「え？」

「おねえちゃんと、あかちゃんと、ふたりのかあちゃんになるんだよね。おばちゃんもスゴいや！」

ヨシオの言葉に、紗季子がふっと微笑みを漏らした。

そのまま尻餅をついている恒彦へ声を掛けた。

「『二人のかあちゃんになる』ですって。ワタシまた親になるのよ。それも二度とも自分のお腹を痛めた子じゃない。一人も二人もおんなじじゃないかしら？」

恒彦はただ、無然として聞いていた。

◇

玄関口で見送る加夏子達に、九十九は穏やかに微笑みかけた。

「まあいろいろあるでしょうが、いちおうは収まったみたいですし、私はここで失礼させていただきます」

「長官、ヨシオ、ありがとう」

加夏子は深々と二人に頭を下げた。

「…にしても、この大男、いやヨシオくんか、彼が肝臓移植のドナーとはな…」

なんだかすっかり勢いの失せた恒彦が、加夏子の後ろからぼそりと声を掛けた。

「偶然という名の神様って、ほんとにいるようですよ、清水さん」

病院で加夏子に言ったのと同じ事を九十九が言った。

微かに振動音がした。

「九十九です」

ポケットから出した携帯電話を耳に当てた九十九の表情がみるみる険しくなった。

「長官、なにかあったの？」

「殉君の容態が急変した」

「えっ！」

「すぐ戻らなきゃならない。君は家で待っていなさい」

「なにいつてるの！　いくわよっ！！」

「駄目だ」

「なんで！？」

「自分がどんな身体か、言わなきゃわからんかね」

何か言い返そうとした加夏子が言葉に詰まった。

その細い肩をぽんとひとつ、九十九が叩いた。

「僕に任せて。大丈夫、必ず何とかする」

「ちょうかん…」

「そんな顔をするんじゃない。君はもう一人じゃないんだ。強くなりなさい」

「…」

「じゃ、失礼します」

九十九は来た道を走り出した。

「ぼく、おねえちゃんといっしょにいるよ」

巨体をすぼめるように前かがみになったヨシオが、上から加夏子を見下ろしていた。

「ぼくのおうち、まだきまってないんだって。センセイいそがしいってあんまりあいてしてくれないし」
「ありがとう、ヨシオ。いてくれていいのよ、うちに」
「ホント？」
「うん。今はワタシも待ってなきゃいけないし、ヨシオがいてくれたら心強いわ。いいでしょ？ パパ」
「あ…お、おう、俺はいいぞ。サキ、お前はどうか？」

紗季子がクスリと笑った。

「調子いいわね、あなたったら」
「そんなことはない」
「いいわよ、またあなたが手をあげるようならヨシオちゃんにやっつけてもらうから。ねっ」
「うん！ いいよ」
「むうう…」

恒彦が思い切り渋い顔をした。